清く正しいスーサイド計画

ゆいまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
清く正しいスーサイド計画

【Ｎコード】
Ｎ１９８５Ｉ

【作者名】
ゆいまる

【あらすじ】
彼氏にふられ、腹いせに死んでやろうと思った私。いよいよ崖から飛び降りるぞといった時に、私の腕を掴んだのは黒服の少年だった。少年は微笑む「自殺を止めるつもりはありません」そして囁く「これから、清く正しい、どこの誰に見せても立派な自殺ができるようにお手伝いしてあげます。とにかく、僕を信じてください」と。今、私と少年の清く正しいスーサイド計画が始まる。

第一話

彼氏にふられた。
私の人生史上最悪のふられ方だった。
好きになって苦節三年。練りに練った私の告白が、彼の「ん？別にいいけど」という気の抜けたコーラのような返事で実り、交際がスタートしたのは半年前。
たとえどんな返事だろうと、恋焦がれた男性の彼女になれるのだから、私に不満なんかあるはずなかった。それまでの努力、苦労、神頼みにストーカー行為、全てが報われたと思った。
彼のその返事一つで私の世界は変わり、過去の暗黒時代でさえも、このばら色の結末への伏線だと思えば悩み泥水をすすった過去の自分を含め愛おしく思えたほどだ。
それなのに、彼にふられた。
昨夜、たった二十時間前に振られた。
終幕の幕引きもまた、気の抜けたコーラのような言葉一つだった。
「え？　俺達付き合ってたっけ？」
目の前が真っ暗になった。
彼に他の女との噂がたち、彼女としての当然の権利の行使と信じ、追求したらこんな返事だった。
だって、あんまりだと思ったもの。
よりによって、その噂の女って、私の幼稚園の頃からの親友なんだから。
そりゃ、確かに、告白してからあったのはこの半年で五回だけ。しかもHできてお金を貸す時に限ってた。
でも、彼は忙しいのだ。
そりゃ、確かに、告白してからメールのやり取りはほぼ一方的に私からだけ。彼からのメールはHとお金の催促だけだったけど。
でも、彼は甘えていただけなのだ。

そりゃ、確かに、電話はたまに拒否されていたけど。
でも、きっと彼の操作ミスなのだ。
イケメンで、甘えんぼで、イケメンで、たまに暴力ふるって、イケメンで、気まぐれで、イケメンで……。
もう、事実はどうでもいい。とにかく、そんな彼が私は好きだった。彼の全部を包んで愛したかった。
なのに……。
暴風が横殴りに私の頬を打った。
足元の不安定さに、私は思わず息を飲む。
唇を噛み、目を閉じると、最後に交わした電話の声が自動再生された。
「っていうか、俺、今、彼女といいところだからさ。もういい？じゃ」
「だれ？」
彼の向こうで含み笑いをかみ締めたよく知っている女の、声がした。
「さぁ？　知らない人」
ツーツーツー
誰？　お前の幼馴染だよ。
電話の向こうの得意げな親友、いや、元親友の甘えた声にむかっ腹が立った。二人で半裸で抱き合いながら。卑らしい笑みで私をバカにしている姿が手で触れられるんじゃないかと思うほどリアルに想像できた。
お前、知ってて今、聞いただろ？　聞いて、私をあざ笑ってんだろ？　とも思う。
私がずっと彼のこと、好きだって、知ってたじゃない。三年間相談し続けて、告白が成功したとき、一緒にお祝いしたじゃない？
なのに、どうして、それを便所スリッパで踏みにじって肥溜めに沈めるようなことをするのかなぁ？
怒りがうねりになって、胸の内側を焦がす。このまま破壊衝動が

沸いて、思い切り叫びながら、あの元親友、いや、悪女、いや、悪魔、いや、鬼、いや……もうなんでもいい。とにかくあの女のどたまを斧かなんかでかち割ってやりたい！

でも、でも……。

そっと目を開ける。

私の前に道はない。私の後に道は……じゃない。私の目の前には本当に道なんかなかった。進むべき道なんかどこにもない。

親友にコケにされ、あの人を失った私の人生に、未来なんかないのだ。

そして、それを象徴するのがこの目の前の景色。

ここは断崖絶壁。自殺の名所。ついでにサスペンスドラマでも時々使われるスポットだ。

足元で灰色の波が黒々とした毛羽立つ岩にぶつかっては砕け散っている。耳に届くのは寒々とした冷たい風と、未練を引きずる女の泣き声のような海鳥の声。

死んでやるのだ。

そして、奴らに後悔させてやるのだ。

お前らの浅はかな行動で、一人の命が消えたという十字架を、一生、背負っていけばいい。幸せになんかさせるものか。死ぬまで後味の悪い思いになってこびりついてやる。

「そうよ……死んで」

「あ～。駄目ですね。全く、なってないですよ」

「へ？」

いきなりした声に私は驚き、本当に一歩踏み出しそうになってよろけた。

「わわっ。ちょい、待って！」

右腕がぐい引かれて、私の体は前後に大きく揺れる。拍子に崖下が思いっきり見えて、私は冷や汗がどっと吹き出るのを感じた。

「いやぁ！！！」

思わず叫び、手足がばたついた。私の腕を掴む何者かまで

「うわぁ！　あわわ！　危ないじゃないか！　ちょっと！」
と声を上げる。
再び、強く引っ張られた。視界が灰色一色に染まる。尻に激痛が走る。背中に、誰かの体が当たった。
「いたぁ～～～」
どうやら、私はしりもちをつかされたらしい。
なんだ？　一体誰なんだ？　人の自殺を邪魔するなんて！
「ちょっと！　痛いじゃない！」
まだ手を離さないその人物を振り返った。
その人物は、他方の手で自分の尻をさすりながら涙目で微笑んだ。
「落ちたらもっと痛いですって」
真っ黒な服の幼い少年だった。

第二話

少年は人懐っこいと言えば月並みだが、その中に見え隠れするずうずうしさを加味すれば、人んちに上がりこむ野良猫のようだった。

「お姉さん、今、ここから飛び降りようとしてましたでしょ。ってか、確実に自殺しようとしてましたよね」

オブラートもなにもあったもんじゃない少年に、私は少々口ごもりながら手を払いそっぽを向いた。

「だったらなんだって言うの？」

ちょうど視線の先にあった「ＳＴＯＰ！　自殺！　飛び込む前にワンコール！　（犬のおまわりさんが電話を差し出す絵）」と言った、ふざけているのか真面目なのか良くわからない自殺防止の看板が目に留まる。私はそんな薄っぺらい偽善を鼻で笑うと唇を曲げた。

「自分の命なんだから、どうしようと自由でしょ。もしかして、アンタ、ボランティアとかなわけ？　それで、私をかわいそうだとか思ったりなんかして、それでもって助けてあげようなんか偉そうに思っちゃったりなんかして、それで……」

「違いますよ」

「へ？」

寒さで凍えかけてきた私の舌を止めたのは、少年の屈託のない一言だった。頭から説得されると思い込んでいた私は、思わず間の抜けた声を漏らし、少年を振り返る。

色の白い子どもだった。

年十七、八くらいだろうか。背も高くはなさそうだし、体も華奢だ。長い睫に風に揺れる茶髪はナチュラルで、国籍不明の顔立ちに良く似合っていた。

少年は再び私の腕を掴むと、目を細めた。

「別に、自殺を止めようなんか思わないですよ。お姉さんの言うことは半分正しい。自分の命なんですものね、勝手にする権利はある」

「そ、そうよ」
意外なリアクションに戸惑った。なんだ？　これが新手の説得なのか？
「じゃ、なんで止めたのよ」
「いや～。全くなってないなと思いまして」
「何が？」
「自殺が、です」
少年はそういうと、少しだけ首を伸ばしてがけ下を覗くようなそぶりを見せた。相変わらずの強風と、うねる灰色の海は今も死を強烈な引力で誘っている。なのに、少年はそんな不穏な空気をからかうかのように、おどけた仕草で「お～怖い怖い」と呟くと、私のほうを見て、心の中まで覗き込むかのごとくじっと目を合わせてきた。
「お姉さん、大方失恋でもしたんでしょ」
「へ？」
「しかも、酷いふられ方だ」
「それは……」
「貢だけ貢がされ、ヤられるだけヤられ、暴力も振るわれ、浮気もされた。……挙句、問い詰めれば彼女じゃなかったなんて言われたりして。で、貴女の親友で貴女よりずっと可愛くておっぱいの大きい女の子に簡単に彼をとられた」
「なによ！」
最後のあの女のくだりは脚色しすぎよ！　私は少年をにらみながら腕を振り払おうと抵抗した。でも、今度は信じられないくらい、彼の手は頑として動かない。
「あのね。そんなんで、ここで死んじゃってもいいわけですか？」
少年は少し意地の悪い笑みを浮かべると、私を逃すまいとじっとその目で見つめ続けた。大きく、キレイな瞳だ。陽光なんかどこにも見当たらないこの寒風吹きすさぶ自殺の名所にあって、まるで彼の瞳の中だけが温かい春の日差しを吸い込んでいるかのように煌いている。

その中に映る惨めな、そう、すっぴんでしかもやつれ、一晩で白髪が増えてお肌もカサカサ、隈もしみもニキビも肝斑も勢ぞろいした自分の顔を見つけ、私はつくづく自分に嫌気がさして目を逸らした。

そうよ。金と体をむしりとられた私は、実際のところ、やせっぽっちでブスで暗くて、何のとりえもない、学歴もない、男運もない、お金ももうない、胸だってない、ないない尽くしの干物のような女なのだ。

こんな私なんか、死んじゃってもきっと誰も……。

「そう！　そこですよ！」

いきなり声が飛びこんできて、私は目を開ける。へ？　私、今、しゃべったっけ？

少年は我が意を得たりと言った風に明るい表情で距離をつめると、いやみなくらいにキレイな頬を寄せた。

「見てください」

視線の先に誘われる。そこは崖下。人気のない、真っ黒な岩と灰色の海。

「こんなとこで死んでも、発見されるのは難しいです」

「え？」

「どうしてこんな所を選んだんですか？」

「どうしてって、ネットで……」

「もう、そこからなってませんね～」

少年と私は、絶え間なく岩にぶつかっては四散する白い波を見つめながら会話する。

「いいですか、あなたの人生一度きりだ」

どこかで聞いたことのあるような月並みな言葉に、少々食傷気味になりながら私はたじろぐ。

「だから、死ぬのは自由でしょ」

「いやいや、自殺を止めるつもりはないですって」

少年はそんな私にため息混じりにキッパリいうと、今度は私の肩

をぐいと引き寄せ、鼻先が当たるほどの距離で私を見つめた。
「死ぬと言うのは一度きりの大仕事です。長く辛い人生の中でたったワンチャンスの檜舞台なんですよ。それを、こんな人気もない、自分にすら縁もゆかりもない場所に選んでどうするんですか」
「それは……」
そういわれてみれば、そうかもしれない。この場所で本当に良かったのか、ちょっと決心が揺らぐ。いや、死んでやるって気持ちは固まったままなんだけど、場所選びは、どうだろう？
「どうせ、死んで自分を振った男や寝取った女に罪悪感を背負わそうなんて思ってたんでしょ」
そこに少年の針の一刺し。
う、さっきから感じていたけど、この子、子どものくせに、なかなかに鋭い。私は少年の肩を軽く叩き、距離をとった。

第三話

「だったらなによ」
「お姉さん、そろそろ気づきましょうよ。だったら、こんな場所、ナンセンスなんですって」
「どうして？」
自殺の名所なのに？
「だって、ここは死体が簡単にあがらないから、つまりは絶対に助からないから自殺の名所なんです」
「だから？　いいじゃない。うってつけじゃない」
確かに縁もゆかりもないけどさ。
しかし、少年は少々大仰なリアクションで大きくため息をつくと、首を横に振った。
「あ～もうっ。全然わかってない！　つまりですよ。お姉さんがここで飛び降りたとしても、死体が見つかるのは早くて半年以上先です。もし見つかっても、すでに白骨化くらいはしている。ここには縁もゆかりもないなら、身元の判明はさらに時間がかかるでしょう。わかった頃には、その二人が付き合ってる保証はないし、仮に永遠の愛を誓って結婚していたとしても、貴女はとっくに「アノ人は今」的なキャラで、夢にも自分達が自殺の原因だなんて思わないんです」
「で、でも、遺書ぐらいは書いたわよ」
私だって、考えてる。しっかりばっちり完璧に、奴らのせいで深く傷つき、死に追いやられた私の気持ちを形にしてきたのだ。
「どこにあるんです？」
「ここに一通と」
靴の下に敷こうと思っていた封筒を一通ポケットから出す。
「自宅に一通」
少年はそれをおもむろに取り上げると、無神経にもいきなり封を切り勝手に読んだ挙句、ため息をつきながら破った。

「ちょ！　なにすんのよ！」
「駄目だ。お姉さん、何もかも、駄目です」
「はぁ？」
遺書に良いも悪いもあるのか？
「ありますよ」
少年は口を尖らせると、白い紙ふぶきとなった私の辞世の句がしたためられた手紙を、宙に放った。それは私たちをなぶる強風にのって、空に舞い上がりすぐに見えなくなる。
「あのね、ここで手紙なんかあっても、こうやって風にすぐ飛ばされるんです。字は汚いし、誤字脱字だらけ。その上に涙と震える手で書かれたせいかまともに読める文字が全く見当たりません。それにね、お姉さん、ラブレターは夜書くなって聞きません？　感情に任せた文章ほど恥ずかしいものはないですよ。こんな支離滅裂な文章、最初の一行で即バックです。こんなもの残して死んだら、恥も恥、死んでからも笑いものですよ」
少年はそういうと立ち上がり、私の腕を引っ張った。
「さて、行きましょ」
これから死のうという人間をけちょうんけちょんにした少年を見上げ、私は呆然とする。思わず
「どこへ」
と尋ねてしまった。少年は灰色の空に目を細め
「とりあえず、無人契約機へ」
「へ？」
無人契約機って、お金？　どうして？
「あと、僕は貴女よりこう見えても年上ですから」
「嘘」
私、三十路。少年はどうみたって……
「童顔なんですよ」
そう苦笑する少年の見えない力に引き寄せられるように私は立ち上がる。

少年は思ったとおり、背が低かった。私の目線と彼の目線では五cmほどの高低差があるように思われた。
「ね、これからどうするの？　私、死ぬのは止めないわよ」
いいながら、思いなおす。この不可解な少年の出現で、ちょっと気勢はそれたけど、その決意は変わらない。
彼のいない世界なんか生きて行く価値はない。あの女に見下されたまま生きていくのなんか、耐えられるわけがない。
少年はそんな私の意思をすっかりまるっき全て知ってるとでも言わんばかりに大きく頷くと
「わかってます。ただ、僕はお姉さんのこんなヘタレな自殺を見ていられなかっただけなんです」
「へ、ヘタレな自殺？」
「ええ。そうです」
少年はそういうと、にっこり頷きそして、こう告げた。
「これから、清く正しい、どこの誰に見せても立派な自殺ができるようにお手伝いしてあげます。とにかく、僕を信じてください」
「清く正しい」
「自殺です」
少年はそういうと、私の手を引き歩き出した。
私はまるで魔法にかけられたか、詐欺にでもあったか、いや実際これは何かの詐欺かもしれない。自殺ボランティア詐欺とかなんとか……とにかく、彼の指摘が的を得ていたのも手伝い、私は心のどこかで彼の話に乗ってみようと思い始めてしまっていた。

第四話

少年は名前を蓮英司と名乗った。
「レン　エイジ」その名前を聞いた時、思わず私は「ホスト？」と口走ってしまったのだけれど、少年は真顔で「全国の蓮英司に謝ってください」と言っただけだった。別に謝ってもいいけど、全国でもこんな名前の人は少ないと思う。
とにかく、蓮は真っ先に私を無人契約機へ連れて行き、お金を引き出せるだけ引き出させた。
「ちょっとぉ、まさか多額の借金させて、このお金奪って逃げるとかじゃないでしょうね」
私が五件目の契約機を出ながらそう聞くと、蓮は
「どうせ死ぬんだから、借金があってもなくても一緒じゃないですか」
と笑った。
いわれてみると、確かに、と思う私はアホかも知れない。
そうやって私は生まれて初めて触る札束というものを手にし、もう二度と帰ってこないはずだった自分の部屋に向かったのだった。

よく考えると、自殺したら部屋も引き払わないといけなかったというのに、私は片付けもしないで出て行っていた。戻った部屋は、いつもの通りで……なんだか気が抜けた。
いけない、いけない。私はちゃんと死ぬのだ。気を引き締めなくては。
「蓮。あのさ……」
私は解けかけた決意を固めなおすために振り返る。とりあえずの今後のことを……そう思ったのだ。が、蓮は
「あ、お茶はぬるめでお願いします。僕、猫舌なんで」
とこの家の主である私を差し置いて、勝手に上がりこみ、コタツ

に足を突っ込んでいたのだった。

猫舌といい、勝手に上がりこむところといい、蓮は本当に野良猫に似ている。一体、彼は何者なのだろう？　私はぼんやりと蓮の長い睫を眺めながら、訊いた所で「どうせ死ぬんだから、どうでもいいじゃないですか」とさっきのように切り替えされるのではと予想を立てていた。

「まぁ、これだけあれば十分かな」

対面に座っている蓮は、小さな手で数え終えた札束を机の上に置くと、オーダーされた通りに私が淹れたぬるいお茶を、それでもふぅふぅと息を吹きかけながらおそるおそる飲んだ。そんなに苦手なら、始めから冷たいお茶を頼めよ。

ちなみに私の部屋、六畳の１Ｋ。年中出しっぱなしのコタツからは、手を伸ばせば大抵のものが取れるように置かれている。けっして散らかってるのではない。他人にはどう見えようと、それは断じて違う。全てが満たされるように、緻密に考え抜かれた上での配置なのだ。

「さてと。始めますか」

蓮はお茶を置くと、パンと景気よく手を叩き、半身を捻り何かに手をのばした。どうやら化粧箱の上に置いていた鏡をとったらしい。

「なかなか女性の部屋とは思えない便利さですね」と褒め言葉か嫌味かよくわからないことを言いながら、にこやかに振り返ると、それを私の前に置いた。

「さて、これを見てください」

「なによ」

だから鏡でしょ？　私は眉を寄せて鏡を覗き込んだ。

「映ってるあなたの顔、酷いと思いませんか？」

う、確かに。反射的に反論しようとしたが、反論の言葉が見つけられず、私は口を噤んだ。

本当に、酷い顔だ。三十路を越えるとしみと言うものに進化する

そばかすが顔を覆っている。目の下の隈は胡坐をかいて居座っているし、額には月面と見まごうばかりのニキビの山脈。頬はこけて、目だけがギョロギョロしている。唇は乾いて皮がめくれているし、その奥に覗く歯はタバコのヤニで黄色く染まっている。なんていうか……不細工と不健康の見本のような顔だ。

そんな私を、綺麗な顔の蓮は目を細め、頷く。

「死んで、お棺に入ります。最後に色んな人が、そうですね、人生でこれ以上ないってくらいの人が、弔問客としてまじまじと、ええ、そらまじまじと貴女の顔を見るでしょう。そんな時、こんなんでいいんですか？」

「良いかどうかって、別に死に顔なんかどうでもいいんじゃない？」

生きているうちはどうのこうの、綺麗になりたいと思う。こんな不細工な私だって、彼に気に入られたい一心で、これまでたくさんの努力はしてきた。でも、死んだ後なんか、ぶっちゃけどうでもいいんじゃない？　綺麗だろうが、不細工だろうが、それこそ潰れていようが、死に顔は死に顔なんだもの。

しかし、蓮は私にそれはそれは長いため息をつくと「全然駄目です。落第」と嫌味なほど低い声で呟き、私の鼻先にひとさし指を突きつけた。

「いいですか！　死に顔を侮ってはいけません。いや、死に顔こそ、大切なんです」

「はぁ？」

「考えてください。想像してください。さっきも言いましたように、たくさんの弔問客が来るんです。そして、その中には……たぶん、貴女の彼氏をとったお友達も、涙なんか健気に演出しちゃって見に来るんですよ」

「あ」

そこまでいわれて、私は蓮の言わんとするところがわかった気がした。

蓮は満足そうに頷く。

「そうです。そこです！　いいですか、この顔を見て「あぁ、やつれたな」「こんなになって可哀相に」なんて同情してくれると思ったら大間違いなんですよ！」
　蓮はコタツから立ち上がると、私の後ろに回り、傷みまくった私の髪を撫でた。
「そんな心根の持ち主なら、はなから貴女の彼を寝取ったりなんかしませんよ。せいぜい「ブスが死んだ。地球に優しいエコ活動だ。これでＣＯ２の削減だ」くらいですよ。もしかしたら「げぇ、きったね～顔。吐きそう、ってか、吐く！」くらい思うかもしれません」
　想像する。リアルだ。あの女なら、私の恋心を肥溜めにストライクしたあの悪女なら、心の中でそれくらいは平気で思うだろう。
　蓮は怒りに青ざめてくる私の頬をなで、さらに続けた。
「彼も来る可能性もありますよね。そしたら、きっと思うでしょうね。可哀そう？　すまなかった？　いいえ、彼が思うのはきっと「こんな不吉なブスと別れて正解だった」です」
　二人して斎場を出た先で大笑いする姿が克明に浮かんだ。そうだ。奴らならきっと蓮の言うとおり、そう思うに違いない。そして、私の死に顔をネタにまたいちゃつきやがるんだ。
　なんてこと！　私は死んでまで奴らのかませ犬になるって言うのか！？
　蓮の囁きは続く。
「しかも、彼らはきっとみんなの前では親友として大泣きしますよ。そして周囲からなんて優しい子なんだ、なんていい人なんだって思われるように演出して、自分達の株まで上げてしまうんです」
　さいってい！
　私は下唇を強くかむと鼻の穴を思い切り膨らませて、じっと鏡の中の自分を睨み付けた。
　なんなのよ。じゃ、なに？　この顔じゃ、私は奴らの笑いものになって、さらに踏み台にまでされるってこと？
「いいんですか？」

蓮が離れた。天から落ちてくる彼の声は、まるで悪魔の誘惑の様に悪意に満ち、天使のように優しかった。
私は目を瞑った。闇に包まれる。奴らの卑しい笑顔と嘲笑が闇の奥の方に感じた。
いいのか？　このままで。
いいのか？　このまま死んで。
このままじゃ、私は……
「そう、全くの死に損。犬死もいいところですよ」
蓮のその言葉が私を目覚めさせた。目を開ける。みすぼらしい私がいる。こんな、こんなの……
「いいわけない」
こんなの、断じて許せるわけない。
私は断言した。蓮は満足そうに「合格です」と嬉しそうに手を叩いた。
「まずは、生まれ変わりましょう。死に顔も、遺影も、見返せるくらいの美人になって！」
蓮が私の肩に手を置いた。そして二人でコタツの上に詰まれた軍資金を見つめる。
「まず第一レッスンは、美容と健康です」
こうして、清く正しく立派な自殺をするために、蓮のレッスンがスタートしたのだった。

第五話

蓮の教育は厳しいものだった。ちょっとでも彼の意から外れようものならば、容赦なく「あ～駄目ですね。ぜんっぜんなってない。落第点もいいとこですよ」のきつい言葉とため息が飛んできた。

蓮が課したレッスンは、引き出した金を投入し、スポーツジムやエステなどと契約し、ある程度の健康を保つ生活が習慣ついてきたところで、次に遺書を書くための文章レッスンが始められた。

と、言っても始めは鉛筆を持つわけではなく、とにかくたくさんの本を読むことだった。

「いいですか、ジャンルは問いません。むしろ偏らせないでください」

「手紙の書き方とかの実用書でいいんじゃないの？」

本を読む習慣なんかなかった私がそういって不満を口にすると、蓮は「いつになったら合格点をあげられるんでしょうかね。死ぬまで無理なような気がしてきましたよ」と大きな独り言をごちてからこう言った。

「どこの世界に、自殺の遺書の書き方をレクチャーする実用書があるんですか」

「あ、それもそうか」

そんなのあったら、きっと著者と出版社には非難の嵐だ。

「とにかく、四の五の言わず、一日に三百ページは読んでください」

「え～。無理～」

「ちゃんと自殺したいんでしょう？　ホントに死ぬ気あるんですか？」

「はぁい」

私はしぶしぶ図書館に向かう。とりあえず、蓮の小言を聞くくらいなら一行でも読んだ方がよさそうだ。なにより……。

チラリ、蓮が部屋の一番目立つ場所に張った彼とあの女の写真に

目をやる。恨みと憎しみが燻っていた状態から一気に、勢いを取り戻した油を注いだような炎の状態に蘇る。
そうだ、私は何が何でも自殺してやるのだ！　立派な死に様で、奴らに後悔させてやらねば！
と、こんな調子で今まで行ったことのない図書館に通う羽目になった。
が、一週間もするうちに本も読みなれてきて、意外に苦痛ではなくなった。
私が文芸小説を十冊ほど読み終えたとき、遺書の練習が始まった。毎晩、書き直しではなく、初めから作り直すのだ。おかげで、日に日に文章は上達し、整理されかつ心情に訴えかけるような遺書を作成できるようになってきた。ちなみに字にもお前はニッ〇ンの〇コちゃんかって言うくらいビシバシ赤で直しがきて、綺麗で正確な文字を要求される。。
「どう？　これでもう十分じゃない？」
私は三十通目になっていた遺書を蓮に突きつけながら鼻息を荒くした。
始めの、あのぐちゃぐちゃで支離滅裂の遺書からは見違えるほど素晴らしい遺書だ。
遺書を丁寧に採点する蓮をよそにコタツに手を突っ込んだ私は、身を捻らせて傍においてある鏡を見た。
死後に見られる部屋が綺麗でないと恥をかくからって、今では掃除も整理整頓も行き届いている部屋では、鏡は前よりも透明度が増して見えた。
鏡の中の自分を目があって、完璧だと思う。健康的で、若々しく、肌もニキビ一つない美しさだ。
「まぁ……五十点といったところですね」
「え～。うそ～」
蓮は私のそんな嘆きを涼しい顔で受け流すと手の中の遺書を丸めてしまい

「じゃ、次の段階に進みましょうか」
とゴミ箱に向けてそれを放った。
私の遺書は綺麗にヘリに当たることなく、ストンとゴミ箱の中に着地する。

第六話

第三のレッスン。それは意外にもバイトだった。

「ここなんかいいんじゃないですか？」

二人で街を歩きながら、蓮が店先に貼られたポスターを見ては私に訊く。私は時給や勤務時間・勤務内容を見ては首を振って拒否していた。だって、彼が薦めるのはどれも接客業ばかり。私の一番の苦手分野だ。私はできれば人と関わる必要のない工場の流れ作業みたいなのが良かった。もくもくと、同じ動作の繰り返し、何かの部品の一部になったような感覚は、孤独を感じなくてすむし、なにより人に気を使うことがないからだ。

「コレもダメですか？」

眉をひそめる蓮の顔が、ファーストフード店の窓ガラスに張られたポスターの傍で歪む。相変わらず綺麗な顔で、相変わらず黒い服装だ。

パッと見、私達は姉弟くらいに見えるかもしれないな。それとも、年の離れたカップルだろうか？　私は悩む蓮をよそにそんな事を考えていた。

周りを見ると、街路樹も街の人たちも秋色に染まっていた。

傍を吹きぬける風もやや冷たく、微孔をくすぐる香りに秋に咲くあの黄色の鈴なりの花を思い出し、少し甘酸っぱい気持ちになった。

「ねぇ、お姉さん」

「ん？　なに？」

「どうしてバイトをおススメしてるかわかってますか？」

「借金を返すため？」

それくらいしか思い当たらない。しかし、蓮は私が言い終わる前に、嫌味たらしく頭を抱えて首を横に振った。

「あ～～。どうしてここまでやってきて、まだそんな思考なんですか？」

「違うの？」
「違います！　いいですか？　お金を稼ぐなら、もっと稼ぎのいいバイトを薦めますよ！」
「じゃ、なによ」
接客業と自殺に何の関係があるというのだ？
「あのね、悪いけど、お姉さん。今、アナタの葬式をしたとして、いったに何人の人間が来てくれますか？」
「あ」
ようやく、わかった。蓮はもしかして……
「そうです！　きっと親戚を除けば片手でも余ってしまうような寒い数になるでしょう？」
蓮はオブラートというより逆に苦々しい言葉で私の現状を言い当てると、腕を組んでファーストフード店の中をにらむように見つめた。
「こういう店では、意外と幅広い年齢層の人間が働いています。しかも、うまくいけば常連客とも顔見知りになったりもする。もちろん、バイトは三つは掛け持ちしていただく予定ですよ。最低でも五十人くらいの弔問客を呼んでもらえないと困ります」
困るって何がだ。
「僕のプライドの問題です」
すかさず心の声につっこまれる。最近、私は本気で奴は心の中が読めるんじゃないかと思う。
じっと彼の顔を見ながら、彼の言葉を追った。
「それに、できるだけ顔を売って置けば、お姉さんを自殺に追いやった二人への攻撃の手数が増えるんです。なんて酷い人間なんだ。なんて可哀そうなことをしたんだ彼らはって、白い目を向けてくれるわけでしょ」
「それは遺書を書く前提よね」
よしよし、見えてきたぞ。つまりは私の死後、奴らの立場をなくさせればいいわけだ。だったら

「じゃ、彼やあの女の友人がいるバイト先とかどう？」
「エクセレント！　素晴らしいです！　それはいいでしょう」
珍しく蓮が声を上げた。褒められることなんか全くなかったから、嬉しくて思わず笑みがこぼれる。
「できるだけ、そういう人と仲良くなっておくといいです。始めは彼らとのつながりは隠したほうがいいですね。でも、悩み打ち明ける風にして、彼らの酷い仕打ちは耳に入れておくほうがいいでしょう」
楽しくなってきた。私は顔を合わせたことのない、もしくは一度しかあったことのないような彼らの友人を何人か頭に思い浮かべながら計画を練る。
「で、私が自殺する直前かそのあとに、その人たちに彼らだってわかるようにした方がいいわね……まるで時限爆弾みたい」
周到に計画を練り、あいつらの外堀を爆弾つきで埋めていき、私のお葬式で一気に爆発する時限爆弾だ。もし、コレがうまくいけば結構なダメージを負わせることができるはず！
「心当たりはありそうですか？」
心なしか蓮の声にも興奮が見え隠れする。具体的になってきた計画に、私もドキドキしながら頷いた。
たしか、彼の親友は居酒屋で働いていて、あの女の学生時代の部活仲間がカフェで働いていたはずだ。彼のことは特に何でも知っている。他にも何件か心当たりはあげることができた。
「いけそうよ」
私は親指を立ててみせる。蓮は強く頷くと「行きましょう」と私の背中を押した。
秋色の昼下がり、自殺への道は順調で、世界は美しく彩り始められているように思えた。

第七話

そんなわけで、人見知りだった私は俄然、人付き合いが良くなった。

人の話を聞き、相手の気持ちを汲み、時には優しい声をかける。そうすると、向こうからもそのうち声がかかるようになる。つまり、私の味方になると言うわけだ。

本をたくさん読むようになったおかげで、話題にも事欠かなかった。どんな趣味の人でもコアなものでなければたいてい合わせることができたし、その趣味繋がりでバイトの外でも知り合いが増えていった。

休日は埋まるようになり、お誘いが重なることも少なくなかった。目論見どおり、奴らの親しい人間とも数人と接触し、中には「トモダチで酷い奴がいてさぁ」なんて奴らからかけられた迷惑を相談してくる人までいた。私の知らない彼らの情報を得て、さらに信頼を勝ち取る、一石二鳥のおいしい出来事もしばしばだ。

人間、死ぬ気になれば何でもできるんだなぁ。

全ては清く正しい自殺のため。立派に死んで、奴らの思うようにさせないため。そう思うと、何にも苦痛じゃなかった。むしろ、毎日が楽しみで仕方なかった。

新しい刺激、目的のある毎日、健康的で見る見るキレイになって行く自分。死ぬと言う目標のおかげでこんなに毎日が充実する何て、思ってもいなかった。

それもこれも、蓮のおかげだ。

私はそう思いながら、図書館の本棚の間を歩いていた。今日はなにを借りよう。蓮はいつも私を家で待っていてくれているのだが、たまには蓮の好きそうな本を、蓮のために借りてもいいかもしれない。そうだ、蓮はどんなのが好きだろう？

顔を上げる。古典小説のコーナーだ。古い背表紙がずらりと並ん

でいる。私はう～んと悩みながら、自殺について語らうのなら、死後の世界の話がいいだろうと神曲に手を伸ばした。その時だった。
「あ、すみません」
全く予期しない方向から手が伸びてきてぶつかったのだ。
「あ、こちらこそ」
慌てて手を引っ込める。そっと相手を伺う。そして私は声をなくした。
胸に何かが打ち込まれたのだった。

「最近、ぼんやりしてるね」
蓮がベッドに寝そべり神曲の次の次に借りた罪と罰のページをめくりながら呟いた。一体、どういうスピードで読んでいるのか不明だが、ここ数日のうちに彼はこの本をすでに五回は読破していた。
図書館のあの人のことを考えていた私は、はっとして思わず取り繕う。
実はあの日から毎日彼の姿を求めて図書館に通っている。手が触れた瞬間、電流が走ったような衝撃を与えたあの人は、図書館の司書さんだった。どうやらよく通う私を、向こうも覚えてくれていたらしく、ここ最近は時間さえあれば彼に本を薦めてもらったり、薦められた本の感想をお互いに話し合ったりしている。
彼の薦める本は、時々難しいものもあったが、感想を話したときに見られる彼の嬉しそうな顔を思うと苦でもなかった。気を抜けば彼のことを思うようになってきていたし、思いあがりでなければいいんだけど、彼も私のことを待ってくれているような気がしてた。
彼に会うと思うとドキドキしたし、もっと綺麗になりたいとも思うようになった。不安と楽しみと少しの恥ずかしさが混じったような感情に、私は毎日がいっそう充実したものになって行くのを感じていた。
張り合いというのだろうか？　自殺以外の張り合いができて、なんだか後ろめたいような嬉しいような複雑な気分だ。

「そう、かな？　ただ、どんな風に死ぬのが一番キレイだろうって思っていただけよ」
なんとなく蓮にはいいづらくて誤魔化す。
「まぁ、場所選びも方法も大切だからね。首吊りとか、最悪だし」
それは少し前に蓮に聞いていた。よく聞くその方法での死はものすごく惨い姿になるのだそうだ。
それは置いといて、蓮にはまだ気がつかれていないようだ。良かった良かった。
蓮はそんな引き攣り笑顔を浮かべる私を、冷めた目でじっと観察していたが、不意に本を閉じ背伸びしながら
「でかけよっか」
と独り言のように言った。
「ん」
外は寒そうなんだけど、まぁいいか。なんだか、このままぼんやりしていたら、せっかくのこれまでの努力、自殺の努力が、無駄になっちゃいそうだし。
私はコタツから出ると、そっとまた無意識にあの人を思いながら、蓮の閉じた文庫に目をやったのだった。

第八話

一歩外に出る。頬に感じた空気の冷たさは刺すように鋭く、じんじんと体の中に染み込んできた。心なしか、靴底に跳ね返る音も硬く冴え冴えとしているような気がする。

日の暮れかけた街は、すぐ傍にある夜の予感を楽しんでいるかのように明かりを灯し始めていた。いつも歩く道の街路樹はすっかり葉を落とし、代わりに暗くなれば青白く光るはずの電球を幾つもまとっている。

私たちは行くあてもなく歩いていた。

ふと、蓮をみる。

蓮と過ごすようになって、つまり彼に振られて死のうと決意してから、気がついたら、もう、随分経とうとしていた。

あの時借りたお金はすっかり使い、返済するようになっているけど、三つのバイトのおかげで全く困らない。思えば、あの日から何もかもがすっかり変わってしまったようだ。

顔を上げる。

あの日の灰色の空が夢だったようにキレイな空だ。

朱鷺色に滲む空と藍色に染まる夜が溶け合って、ふんわりと世界を包んでいる。

「蓮」

「ん？」

それまで黙っていた蓮に声をかける。ずっと聞きたくて、不思議と聞きそびれていた事。今、聞かないといけない、そんな気がしたから。

「アナタって、一体、何も……」

「あ！」

蓮が急に鋭い声で私の視線を弾いた。私は瞬きし、何事かと首を捻りながら彼の視線を追う。

その視線の先に気がついた私は、言葉を失った。
「あ……」
彼とあの女だった。
バカップル丸出しのいちゃつきぶりで、人通りの多いこんな道の上でキスしている。その絡まり具合といったら、下手なＡＶみたいでグロくてキモい。
「おえ」
私は茶化して蓮に舌を出してみせた。蓮は苦笑して肩をすくめた。
夜が静かに空に染み渡るのを感じた、瞬間、それまで点いていなかった街路樹のイルミネーションが一気に灯り、世界を明るく優しいものにあっという間に変化させたのだ。
私は思わず声を上げ、それらを見回した。
淡い光に包まれた世界では、どの人の顔も、どの街の表情も、みな幸せで優しそうに見える。
「あぁ」
思わず吐息を漏らし、目を細める。
体から何か重い塊のようなものが、ゆっくりと蒸発するように消えて行くのを感じた。まるで、さっきまで燃えるように赤く染まっていた空が、風に吹かれ少しずつ優しい夜に包まれていくように……それはごく自然なことだった。
蓮を振り返る。
蓮もイルミネーションを楽しんでいたらしく、幼さの残る横顔でそれらを見上げていたが、私の視線に気がつくとにっこり笑った。
「蓮、凄く綺麗だね」
「ええ、そうですね」
蓮はそう言うと一歩、私との距離を縮めた。すぐ傍で上目使いで見上げてくる瞳はやっぱり綺麗だ。
「お姉さん」
「何？」
無意識に自分の声も優しくなっているのに気がつく。蓮は目をす

っと細めると、まるで私に悪戯をけしかけるような口調で、こういった。
「ここで死んでみましょうか？」
「え？」
予想もしなかったその言葉に、私は言葉を失い周りを見回した。
休日の夕暮れ。ショッピング街の歩行者道路。そこで、美しい少年は笑顔で私に何かを差し出している。見ると、どこから取り出したのか、それは鋭いナイフだった。

第九話

「これで頚動脈を一気にいけばいいですよ。彼らの目に十分触れる距離ですし、インパクトも申し分ない。遺書は昨日下書きしたのでいいですよ」
「え、ちょ」
蓮はさらに私にナイフの柄を差し出した。まるで受け取らないといけないとでも言わんばかりに。
「ずいぶん、キレイにもなりました。今なら、死に顔は周囲を彩る棺の中の花々よりも美しく見えるでしょう。バイトで友達も増えたでしょ？　最近メールよく来ますもんね。僕の見積もったところでは弔問客はゆうに五十超えます」
「ちょと、まってよ」
確かに、確かにそうだ。蓮の言うとおりだ。最近の私はナンパもされるようになった。友人もできた。遺書だってきっと申し分ない。場所も、タイミングも、方法だってきっと悪くない。そう『清く正しい立派な自殺』には最高の舞台かもしれない。でも、でも！
「私……」
「ん？　なんです？」
「わたし、私……」
心の中に芽生え始めていたものが、柔らかい土を押し上げ外界に出てくる若い芽のように私の唇をこじ開けようとしていた。
胸の中にあるもやもやと渦巻いていたどす黒い霧が、青白いイルミネーションに触れ、霧散し浄化して行く。そしてその代わりに吹き込む風は柔らかく温かい。それはやがてその若い芽を引っ張り出すように、誘い、呼びかける。
「……私」
唇がわなないた。指先に力が入らず、目だけは金縛りにあったように鋭い死を呼ぶナイフの光を見つめている。

ぎゅっと目を閉じた。
懸命に死ぬ理由を探す。
あんなに死にたかった。死ぬために努力もした。死ぬ気で、ここまでやってきた。
なのに、どうして？　私の中の引き出しをどれだけ引っ張り出し、その中を隅の隅までまさぐっても、私を支配していたあの感情が見当たらない。
「お姉さん？」
蓮の声。何の感情もこもらない、契約されたから差し出した、この求めにこれを与えたのだというだけの平たい声だ。
私はそっと目を開け、ぎゅっと自分の手を胸のあたりで握り締めた。干上がった喉には唾すらその奥に通さず、私はナイフから目をそらすために蓮を見つめた。
風が吹く。息吹き始めたその思いを形にしろとそそのかす。
唇がふるふると震え、そして……
「もう、あんな奴らのために死にたくなんかない！」
気がついたらその言葉が勝手に口をついて出ていた。私は自分で自分の言葉に驚く。
そして、振り返る。私の声にやつらが気がついたのかこちらを見ていた。
代わり映えのしない、チャラい男と、ケバイ女がそこにいた。でも、もう、私にはそれ以上もそれ以下でもなく、ましてや自分の人生を投げ出す価値があるほどのものなんかじゃなかった。
「おい。もしかして……」
好色な目で近寄ってこようとする彼。明らかにあの女のことを忘れ、私に言い寄ろうとする愛想笑をたたえている。その向こうには悔しげなあの女の顔。私が見たくて仕方なかったはずの光景だ。
でも、でも……
「もう、自殺なんてどうでもいいよ」
私は思わず笑うと、今度は私が蓮の手を取った。そして奴らの傍

を通り抜け走る。人ごみの中を、優しい夕暮れ色の街を、気持ちのいい風に吹かれながら、私は走ったのだ。
私の足が地面を蹴った。私の手が蓮を引いていた。私の目には星を湛えだした薄暗くも優しい明るさを伴った宵空とイルミネーションの輝く光の道。
鼓動が胸を打っていた。気を抜けば溢れてきそうな涙が鼻先をつんとさせ、喉に痛みを、目頭にぼんやりとした熱を与えている。
私は、私は……まだ死にたくないのだ！

私達は通りのどんつまりにある、小さな公園でようやく止まった。
乱れた呼吸に上下する胸の奥でコトコトなる私の心臓。生きている。生きているのだと思った。
「あはは。久しぶりに走っちゃった」
「お姉さん」
ベンチに座り込む私を見下ろすように、蓮は立っていた。沈み行く膨張した太陽を背負っているせいか暗く影になった蓮の顔はよく見えなかったけど、私の気持ちは嘘のように晴れ晴れとしていた。
「ごめん。蓮。せっかく色々教えてもらったのに、私、もう死にたくなくなっちゃった」
風が吹く。木の葉が舞う。
ようやく私は私の変化に気がつき、そして認めた。
私は私のことが好きになったんだ。生きて行くことが楽しくなってきてる。
それに……図書館の彼のことを思い出す。どうやら新しい恋も始まっているみたい。
今、死ぬなんて……できっこない。
「蓮？」
何も答えてくれないのに不安になって声をかけてみた。
耳に何かが触れるような感覚に、蓮の表情を確かめようと立ち上がりかけたとき、今度ははっきり聞こえた。

鈴を鳴らすような音。蓮の小さな笑い声だった。
「こうなると思いましたよ」
「え？」
私は耳を疑う。
「だって、もともとお姉さんは「死ねない」人だったんですから」
私は目を凝らす。
でも、すぐ傍にいるはずの、その蓮の顔が良く見えない。目をこするが夜の闇がそのまま私を目隠しでもしているかのように、全体の輪郭がつかめない。なのに、音だけは妙にはっきり聞こえて、私は焦りながら手を伸ばす。しかし、そこにあるはずの蓮の手はない。
「蓮？！」
一歩先で声がする。
「お姉さんはまだ自分の人生を生きていなかった。死ぬってのはね、生きている者にしかできないんですよ。ちゃんと生きているから、ちゃんと死ねる。反対にちゃんと生きてない人はちゃんとは死ねないんです。たとえ肉体が活動を停止しても魂は彷徨ってしまう」
「蓮？」
どうしたの？　どうして、蓮の顔が見えないの？　私の目がおかしくなった？
どんどん蓮の輪郭があやふやになって行くのに私は必死に目をこすった。しかし、何度こすってもこすっても、蓮はふわふわとその姿をぼんやりとさせて行く。
「お姉さんは、まだ生きるべき時間がたくさんあったんです。僕、始めに言いましたよね？　お姉さんの言っていることは半分正しいって。そうなんです。自分の命、自分の人生なんだから、もっと好きにしたらいいんです」
「蓮？」
いやな予感に、私は思わず声を上げる。
「ただし、もっと自分の可能性を信じてね」
蓮が、また、笑った。はっきり見えないけど、そんな、気がした。

急に眩しい光が射した。あまりのことに私は言葉と視界を奪われる。
「でも、皮肉ですよね。お姉さん、本当にきれいになるんですもん。恋したせいもあるんですかね？　あんまりキレイで、これ以上傍にいると、連れて行ってしまいたくなりますから……」
「蓮、なに言って……」
「僕は、もう行きますね。お姉さんとの日々、楽しかったですよ。お元気で。さようなら」
「蓮！」
世界が真っ白になった。
「れんーーーーー！」
私の叫びだけが空しく響き、そして私は一人、この世界に残された。

第十話

目を開けたとき、私はまだあの崖の上にいた。
「え？　え？」
慌てて周りを見回す。あの日と何も変わらない灰色の海に重苦しい曇天。ポケットをまさぐると、あの破り捨てられたはずの酷い遺書がそのままになっていた。携帯をあける、日付も動いていなかった。
「一体、今のは……」
私はぼんやりとしながら蓮のことを、蓮と過ごした日々を思い出そうとした。全てがしっかり思い出せた。ただし、蓮のことに関することを除いて。
彼とどうやって一緒に住んでいたのか、彼とどんな会話をしたのか、そしてどんな顔だったのかさえも……一秒ごとに全てが霧に覆い隠されるように輪郭がぼやけて行く。
「れ、ん……？」
私は白昼夢でもみたような気持ちのまま家に戻った。

それから私は一人で、蓮を思い出すように、蓮に教えられた通りにしてみた。
美容と健康に気を使い、本を読み、新しいバイトを始め、積極的に人に関わり、そして恋をした。ただし、無人契約機でお金を借りはしなかったけど。
今、私は蓮と歩いた道を、図書館で出会ったあの人と歩いている。
手を繋いで、バカップルの傍を通り過ぎたけど、やっぱり何にも思わなかった。あんなに思いつめていた日々がもはや別人のもののようにすら感じた。
「今でも、不思議なのよね」
私は呟く。隣を歩くこの人には大まかなことは話していた。信じ

てくれているのか、夢だと思っているのかはわからないが、彼はバカにする様子はなく「そうだね」と彼なりに考えを巡らせてくれた。
「いつか、また会えるといいね。その……」
「蓮。蓮英司」
唯一ハッキリ思い出せるその名を口にした。そして、私ははっとする。
蓮英司。その名に隠された彼の正体を、わかった気がしたからだ。
「なんだ、そういうこと」
思わず笑いがこみ上げ、私は口に手を当てた。彼が
「え？　何？　何かわかったの？」
と目をしばたかせる。
蓮英司。
ＬＥＮとＡとＧ。つまり……蓮はＡＮＧＥＬだったのだ。
私は悪戯な天使のあの笑顔を思い出し頬を緩めた。
「そうね、いつかは会えるよね。そのために、私、頑張るよ」
蓮は私に教えてくれたよね。どうしたら、ちゃんと死ねるかどうか。ただし、自殺の方法じゃなかったけれど。
私は不思議がる彼の顔を見ながら小さく笑った。
光の中で、蓮の「満点、合格です」の声が聞こえた気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1985i/

清く正しいスーサイド計画

2010年10月8日15時27分発行